道徳教育地域支援委託事業実施報告書（令和元年度）

1　学校の概要

⑴　**学校名**　　善通寺市立西中学校

⑵　**所在地**　　香川県善通寺市文京町四丁目1番1号

⑶　**学年別児童生徒数及び学級数、教員数**　　（令和元年5月1日現在）

第1学年	第2学年	第3学年	特別支援学級	児童生徒数計	教員
3学級 81名	3学級 86名	3学級 95名	4学級 8名	270名	28名

2　研究主題等

⑴　**研究主題**　　互いに支え合い 高め合い、生き方についての考えを深める特別の教科 道徳をめざして

⑵　**研究主題設定の理由**

本校では、学校教育目標「互いに支え合い　高め合いながら課題の解決に努める生徒の育成」の下、教育活動全般を通じて互いの人間性を認めながら、本音で語り合える学級づくり、仲間づくりに取り組んでいる。また、昨年度に本事業の指定を受け、「校内体制の再構築」や「考え・議論する道徳の授業づくり」、「保護者・地域との連携」等について実践を積み重ねてきた。

その成果として、各種学力調査における生徒質問紙の社会性・道徳性に関わる質問項目に改善が見られた。しかし、地域の方々とのふれあいや自己有用感に関する項目で、学年が上がるにつれ、生徒の意識の低下がうかがえた。そこで、道徳の時間をさらに充実させるとともに、教育活動全体を通じた道徳教育の推進により、根気強く何かを成し遂げようとする実践力を育てたり、夢やあこがれを抱かせたりする。また、地域の方々の力添えをいただきながら、自分に自信をもたせたり、人に積極的にかかわったりできるようにする。

⑶　**研究内容及び方法**

①　道徳教育の充実を促す指導体制

ア　３プロジェクト（教材Ｐ・連携Ｐ・環境Ｐ）による指導体制の充実（チームとしての道徳教育の推進）

イ　ローテーション道徳（全教員による授業づくりと評価）

ウ　一人一人のよさや成長を実感させる評価の工夫（リフレクションシートを活用した内省）

②　道徳教育の質的転換を図る授業づくり

ア　問題解決的な学習（道徳的価値を実現するための中心発問の改善）

イ　登場人物への自我関与の意識を高める学習（道徳的価値の理解を深めるための指導方法の改善）

ウ　多角的・多面的な見方へと発展させる学習（モラルジレンマ教材・価値葛藤教材による授業実践）

③　保護者・地域との連携

ア　道徳通信の発行（保護者や地域への情報発信：月1回程度）

イ　地域とつながる道徳（地域人材をゲストティーチャーに迎えた一斉道徳）

ウ　地域ボランティアを通した心の醸成

④　心に訴えかける環境づくり

ア　心に訴え、考えさせる掲示の充実

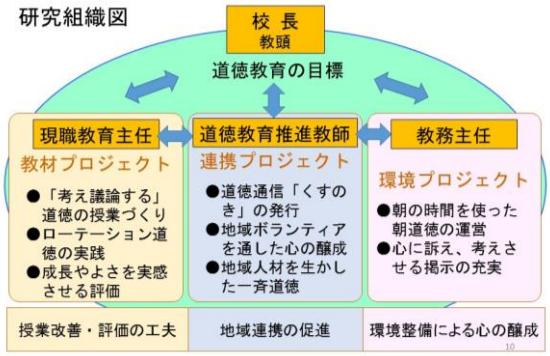
イ　朝道徳の工夫

３　研究実践

(1)　道徳教育の充実を促す指導体制

①　３プロジェクト（教材Ｐ・連携Ｐ・環境Ｐ）による指導体制の充実

研究組織図



研究を推進する上で、校内体制は非常に重要である。校長の教育方針の下、道徳教育推進担当教員を要として、全教職員がチームとして取り組める体制づくりこそ、すべての出発点である。そこで、本校では、全教職員が、３つのプロジェクトに所属し、研究・実践を進めるとともに、さらに深化させたいと考えた。

１点目は、現職教育主任をチーフとした教材開発や評価研究を行う「教材プロジェクト」、２点目は、道徳教育推進教師をチーフとした道徳通信や地域ボランティアの中核となる「連携プロジェクト」、３点目は、教務主任をチーフとした校内掲示や朝の道徳を運営する「環境プロジェクト」である。それぞれ、「授業改善・評価の工夫」や「地域連携」、「環境整備による心の醸成」という役割を担う。そして、それぞれが相互に関わり合って、本校の道徳教育の目標達成に向けて取り組む。具体的な連携の方法としては、各学年団の職員が、それぞれのプロジェクトに分担して所属することにより、円滑な運営ができると考えた。

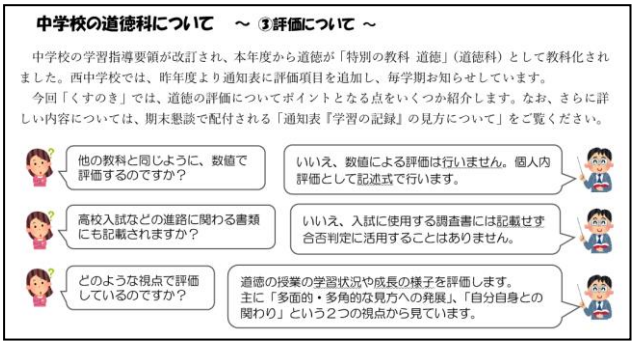
②　ローテーション道徳の実践

本校では昨年度からローテーションに沿って担当になった教員が道徳の指導案を作成し、各クラスを回りながらその指導案の授業を行うという形を取ってきた。メリットとして、十分な授業準備ができること、同一教材の積み重ねにより教材研究が深まること、生徒は様々な教師の授業を受けることができる、ということを考えた。

今年度、教材研究は大きな課題であったが、ローテーション道徳を行うことで、担任に限らず全教職員が教材研究を進めることができた。また、様々な教員が多面的に生徒を評価したり、担任がT2の様な役割で授業に入ることで、じっくりと生徒の見取りができたりするなど、評価の面でもメリットがあった。

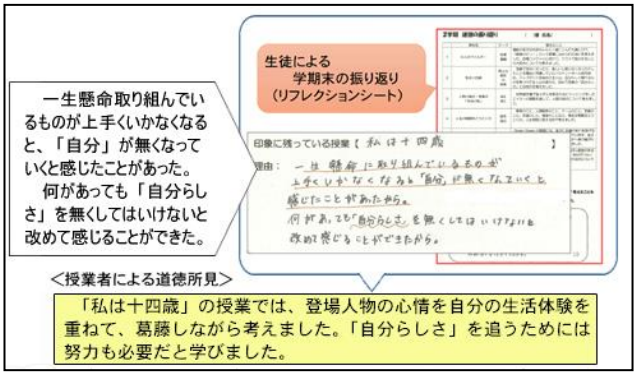
③　一人一人のよさや成長を実感させる評価の工夫

昨年度より、道徳の時間の生徒のよさや成長ぶりを、通知表を通じて保護者に知らせている。また、道徳通信等を利用して道徳科のねらいや評価方法等をＱ＆Ａ形式で周知する取組も行った。



【道徳通信くすのきに掲載した道徳の評価についてＱ＆Ａ】

道徳の評価をするにあたっては、リフレクションシートを活用して生徒自身による道徳の振り返りを行っている。生徒が、特に印象に残った授業や、その授業で感じたことを書くことで、「いろいろな立場から考えようとする姿」や「自分との関わりの中で考えようとする姿」などを見いだして評価することに繋がっている。



【リフレクションシートから授業での様子や変容をつかみ評価する】

ただ、継続的に生徒のよさや成長の様子を適切に見取っていくことは簡単ではない。したがって、生徒理解の工夫や学習指導要領の趣旨理解等を深める研修を今後もさらに充実させていきたい。

⑵　道徳教育の質的転換を図る授業づくり

①　研修計画の立案

道徳の授業等を充実させるために、本年度の研修計画を次のように設定し、研究を進めた。

月	研修計画	具体的な内容
４～５	研究計画	全体計画、年間計画立案、研究体制整備、研究主題・内容等の検討
６	授業研究① 要請による学校訪問	１年授業「いじめに当たるのはどれだろう」 ２年授業「遠足で学んだこと」
６～７	道徳科の評価の方向性	保護者への説明資料の検討、評価の方向性についての共有
８	校内研修	１学期の実践の振り返り
１０	授業研究② 先進校視察①	２年授業「なみだ」 ３年授業「二通の手紙」 全日本道徳教育研究大会 鳥取大会
１１	研究実践発表 先進校視察②	四国小・中学校道徳教育研究大会　（香川県　詫間中学校） 高知県中土佐町立久礼中学校　中間発表会
１２	かがわの教育づくり	研究発表(研究のまとめリーフレット配布)
２	校内研修	道徳科指導力向上研修（LGBT）　講師：木村アンリ氏
２～３	次年度構想	本年度の反省、教科書に準拠した全体計画・年間計画・別葉の作成

② 考え・議論する道徳への質的変換

道徳の授業の質的変換を図るために、「教科書教材の登場人物への自我関与」、「中心発問の吟味による課題意識の持たせ方」、「互いに聴き合い、自他の考えをつなげる授業」といった視点で、授業改善を進めてきた。単に活発な議論を目的とするのではなく、自己の内面形成を図る取組になっているかが重要であると考えた。以下に、本年度から使用の始まった道徳の教科書教材を使った３つの実践を紹介する。

実践ア　１年　教材名「いじめに当たるのはどれだろう」B-(9)相互理解・寛容【中心発問の工夫】

生徒たちが楽しそうに過ごしている休み時間の教室内のイラストを見て、いじめに当たる行為やその根拠を考える活動が本時の主な活動である。よく見てみると、ごみを投げつけられている子、机やノートに落書きをされている子、後ろから友達に腕を捕まれている子など、実は多くの問題点が隠されている。

まず、自分がいじめだと思う場面を探し、その理由を書き出す。この活動は、生徒一人につき１台タブレットPCを配布し、資料の配付、活動、発表などを、タブレットPCを用いて行った。そして、いじめだと判断した場面と理由をグループごとにまとめ、発表した。

【タブレットPCに自分の考えを書く様子】

中心発問の工夫として、資料の一部分に焦点を当て、「この場面はいじめだと思うか？」と問いかけた。「２人とも楽しそうだからいじめではない」と考える生徒や、「笑っているけれど、心の中では辛いかもしれない」「泣いたり怒ったりしたら余計にいじめられるから、笑っているのではないか」など、様々な意見が出た。ある生徒は、はじめは自分の意見として「どちらも笑顔で楽しそうだったら遊び」と書いていたが、授業での意見交流を通して、「一人がいやがっていたら」いじめ、「全員が楽しいと思っていたら」遊び、というように、見た目だけではなく、相手の心の中に考えを巡らせるような視点を持つことができた。終末の振り返りでは、以下のような感想が見られた。

- 相手と遊んでいて、笑っていたけれどやめてと言われたことがある。次からはこんなことをされたらいやだろう、とか、相手のことを考えて気をつけて行動したいです。

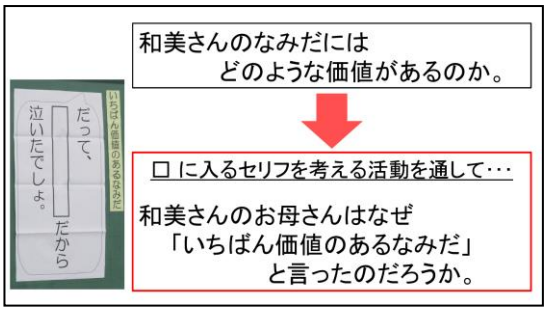
実践イ　２年　教材名「なみだ」B-(9)相互理解・寛容　【自我関与を促す手立て・中心発問の改善】

Ｓ君の不注意により大きなけがをした「和美」の家にＳ君と母親が来て、母親はなみだを流しながら謝罪をするが、和美はそのなみだを「自分の息子のために泣いているのでは･･･」と素直に受け取れない。しかし、部屋で1人になって考えると、自分のためになみだを流してくれたのではないかと気付き、様々な思いからなみだを流してしまうが、そのなみだを見た母親に後日、「今まででいちばん価値のあるなみだだと思う」と声をかけられ、胸がいっぱいになるという話である。

生徒の自我関与を促す手立てとしては、文章を前半と後半にわけて提示した。前半部を範読し、「あなただったらどうするか。」「あなただったらどう思うか。」という発問によりさまざまな意見を出させたあと、「実は･･･」という形で後半へとつなげた。

【自我関与を促す板書の工夫】

中心発問の改善として、１回目の授業で「和美のなみだにはどのような価値があるだろうか。」と発問したところ、多くの生徒の思考が止まった。そこで、２回目以降の授業から発問を変え、和美の母親の核心をつくセリフを空欄にして提示し、そこに入るセリフを考えさせたところ、生徒の思考の動きが活発になった。これは、ローテーション道徳だからこそできたことでもある。



【思考を活性化する中心発問の改善】

この実践での生徒の振り返りから、一人ひとりが自分のこととして捉えることができていたと思われる。今後の課題として、その内容を学級全体で共有する時間を確保していきたいと考える。

- 一度いやな気持ちになって人をうらんでしまうと、周りのことが見えづらくなってしまうのに、その中でも相手の気持ちを考えて涙を流したところに感動しました。自分は周りの人のことを見るのはあまり得意ではないが、気付いた時にはしっかりと周りを見て、相手の気持ちを考え、行動できるようになりたいと思います。

実践ウ　３年　教材名「二通の手紙」C-(10)遵法精神・公徳心【価値葛藤教材を活用した、考え・議論する道徳】

教科書前半の、子どもを入園させるかどうか悩む部分と後半の二通の手紙を受け取る部分に分け、授業を２時間構成とした。１時間目には、文章の前半を読み、元さんの物語としてではなく、「あなたなら・・・」という視点で、自分なりに決断させ、考えをしっかりとまとめさせた。そして、それぞれの意見を授業者が確認し、次の授業までに、似た意見の生徒同士のグループを作っておいた。

２時間目の授業では、まず、似た意見を持つグループの中で意見を交流させ、その後、出た意見を全体の場で発表し、他のグループの意見を聞くことで、異なる意見を知る。これらをくり返すことで、交流し合う時間を十分にとり、意見の違いに気づかせた。

授業の後半では入園させた決断に対して送られた、二通の文章（つまり、感謝の手紙と懲戒処分の文章）を、実際に封筒に入れた手紙の形式で配布し、それを受け取った気持ちを意見交流させた。

最後に再度、決断させ、授業の振り返りの時間をしっかりとった。振り返りでは、

- 意見を交わし合うことで、より深く物事を考えることができた。
- 判断を下すときに、だれを幸せにできるか、だれに迷惑をかけるかを考えることは大切だと思った。

など、決断するにあたっての過程を振り返り、今後に生かそうとする生徒の姿が見られた。

また、３年生においては、２年次からモラルジレンマ教材を使った授業を年に数回行ってきた。その中で、生徒が自分の意見を持ち、その意見をグループやクラスの中でしっかりと主張し、相手の意見を聞き入れるといった、「考え・議論する」土台が十分に培われていたことが、この価値葛藤教材の授業においても大いに生きる結果になった。

⑶　保護者・地域との連携

①　道徳通信「くすのき」の発行（月１回）

保護者・地域との連携のための取組の一つとして、昨年度から、道徳通信「くすのき」を発行している。通信は月に１回程度発行しており、保護者や学校評議員はもちろん、校区内の公民館にも配布している。そこから、さらに地域の方々に配布して頂くようにしている。

通信の主な内容は、道徳の授業の様子や生徒の感想で、資料のあらすじや発問の内容を取り上げたり、班での話し合いの様子などを、写真で伝えたりしている。また、今年度は、道徳の教科化にあたって、道徳科に関する基本的な情報も掲載した。たとえば、道徳の内容項目、道徳の評価について、保護者の方にも分かりやすいよう工夫して知らせた。

さらに、双方向性のある通信を目指して、返信欄を設けている。はじめのうちは返信がくることは少なかったが、保護者の方が活用しやすいように、簡単に答えられるアンケートを取り入れるなど、少しずつ改良してきた。表面は丸を付ける、数字を選ぶなど、単純で時間のかからないアンケートにし、裏面に感想や意見を書いてもらうようにした。実践事例にあった「二通の手紙」を通信で紹介した際には、「子を持つ親としてはかわいそうな気持ちになる」や「この状況を考えると、弟を思う姉の気持ちを大切にしてあげたいと思う」といった意見を、通信を通じて聞くことができた。このような、保護者の方からの返信やアンケートの結果は、次号の通信で紹介している。

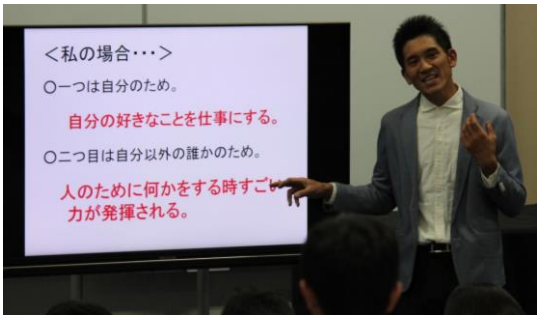
「くすのき」を昨年度から継続してきたことで、保護者の方の道徳への関心が、少しずつ高まっているように感じられる。今後、通信を読んだ保護者が、「今日の道徳であなたはどっちを選んだの？」「どんな意見を持ったの？」などと子供に問いかけ、家庭においても道徳を考えるきっかけとなってほしいと願っている。

【道徳の実践を地域に発信（双方向性の通信を目指して）】

② 地域人材を生かした学年・全校一斉道徳

２年生では、自分の将来や「生き方」について考えられるような取組を行いたいと考え、３名のゲストティーチャーの方を招いた。生徒がより身近に感じることができたり、自分のこととして考えられたりできるよう、地元に縁があり、様々な職業でご活躍されている方にお願いした。

１人目は、無農薬栽培の農家を営んでいる石﨑真彦さん。農業を始めるにあたって、苦労した事や、農業という仕事をしていく上での苦労ややりがいをお話して頂き、仕事の内容だけでなく、「何のために働くのか」について考えるよいきっかけとなった。



【無農薬栽培の農業を営んでいる石﨑真彦さん】

２人目は、日本航空の国際線副操縦士、西村光市さん。善通寺市在住で、職場となる空港までは飛行機で通勤しているというお話もあり、生徒は驚きと興味を持って講話を聞いていた。「香川県、そして善通寺市のことが好きで、これからもこの地で生活しながら仕事を続けていきたい。」と語って下さった。パイロットという仕事に就くまでの経緯や失敗談もありのままに話して下さり、生徒は、夢を実現するにあたって、今、何をすべきかということを真剣に学んでいた。

【日本航空の国際線副操縦士　西村光市さん】

３人目は、善通寺市にある「四国こどもとおとなの医療センター」のアートディレクター、森合音さん。「四国こどもとおとなの医療センター」は、本校の生徒にとっては大変身近な病院である。病院の内外には、様々なアートが描かれていたり、庭園やプレゼントの入った小窓があったりと、患者さんの心を癒すための工夫が多くある。それらのアートを監修しているのが森さんである。

【ホスピタルアートディレクター　森合音さん】

森さんは自身のつらい経験や、今の仕事に出会って立ち直ることができた経緯などをお話し下さり、病院にこそ芸術は必要という考えを示された。

森さんの講話を聞いた生徒の感想

- 印象に残ったのは、ネガティブが全部だめで、ポジティブで追いやってしまうより、ちゃんと受け入れて生きていく方がいいということです。
- 痛みを感じることにより、今まで見ていたものが違うように見え、なんでもなかったものが特別なものになる。ホスピタルアートは、ただ病院をかわいくしているのではなく、病院にいる人たちで作っている特別なものなんだと感じました。

全校一斉道徳については、ＰＴＡ研修委員会に協力を願い、地元地域で活躍する著名人をあっせんして頂くとともに、ＰＴＡ活動とコラボレーションして、保護者の参加も募り、「みんなで学ぶ道徳の日」と位置付けた。様々な分野の方からお話を頂くことで、物事を広い視野から多面的・多角的に考えたり、人としての生き方を考えたり、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てたりすることを目的として実施した。

【FM 香川ラジオパーソナリティ　市川智子さん】

今年度は、ＦＭ香川ラジオパーソナリティである 市川智子さ

ん に「ことばの力」という演題でお話をして頂いた。インターネットやテレビを通じて、映像で様々な情報が流れる現代、「ことば」と「音楽」を大切にしているラジオパーソナリティならではの視点で、心に響くお話をして下さった。保護者や地域の方の参加も募り、多数の参加があったことで、生徒たちとの間で共通の話題を提供することができたと考えている。

③ 地域とつながるボランティア活動

本校では、従来から数々のボランティア活動に取り組んでいる。その中でも、本校の特色ともいえる「お接待ボランティア」は、総本山善通寺の境内にて、年に２回実施している。お接待ボランティアとは、善通寺に来られたお遍路さんや観光客の皆さんにおもてなしの心を持ってお茶などをふるまい、旅の疲れを癒していただく取組である。全学年からボランティアを募り、総本山善通寺で夏は冷たいお茶、冬はお茶を温めて配っている。また、お茶だけでなく、手作りのアクセサリーやしおりも配布した。お遍路さんや一般の参拝者だけでなく、世界各地からの観光客に対しても、おもてなしの心を発揮してことばの壁を乗り越えて積極的に話しかける姿が見られた。

ボランティア活動等

- あいさつボランティア
- 清掃ボランティア
- お接待ボランティア
- 善通寺養護学校夕涼みボランティア
- 市民ふれあいフェスティバルボランティア
- 医療センター屋上庭園ボランティア
- 街頭募金ボランティア
- 幼稚園ふれあい体験　　など

【お接待ボランティアの様子】

今年度８月４日に行ったお接待ボランティアには、５５名の生徒が参加した。１２月１日には、今年度２回目のお接待ボランティアを行い、４３名の生徒が参加した。そこでは、お茶をお渡しするだけでなく、お客様の話を聞いたり、外国の方に積極的に声をかけたりと、会話を楽しむ生徒の姿が１回目よりも多く見られた。

お接待ボランティアを通して、人との関わりを大切にする心や、自分たちの学校や活動への誇り、郷土を大切に思ったり知ろうとしたりする心など、たくさんの心の成長に繋がっている。

お接待ボランティアに参加した生徒の感想
- 次回のお接待ボランティアにも参加したいし、もっと会話を広げられるようになりたい。
- 善通寺の良いところをもっと知ってもらえるように頑張りたい。
- 会話をすることで、西中の活動のことも知ってもらえたし、観光客の方のことも知ることができた。
- 「あっちには何があるの？」などと聞かれたが、分からなくて困ったので、答えられるように調べておきたい。

(4)　心に訴えかける環境づくり

① 校内掲示の工夫

学校における道徳教育は、道徳の時間を要として、学校生活全体において行われるものとされている。環境づくりの一つとして、校内の至るところに、元気になったり、優しい気持ちになれたりするような言葉やイラストを掲示している。悩んだり、立ち止まったりしたときに、そ

【生徒会が作成した大パネル掲示等】

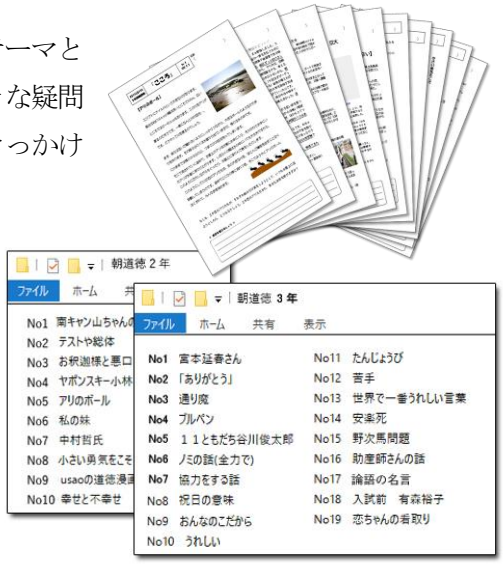
っと背中を押してくれるような様々な言葉を並べている。玄関付近の廊下には、仲間と協力したり、絆を深めたりした様々な行事や生活、学びを振り返る場として、多くの写真を掲示している。また、友達の良いところを書いたカードを掲示したものは委員会活動と連携して制作した。自分や友達が作った掲示物は、より温かみや安心感を与えるものとなっているようだ。

② 朝の道徳

毎週月曜日の朝学活の時間を「こころ」として、様々な資料を紹介し、感想を書く取組を行っている。道徳の教科化により、授業は教科書を使って行うが、過去の道徳教材や本、ニュース、インターネット記事などには、生徒に知って欲しい、考えて欲しいと思う資料が多くある。そういった資料を定期的に紹介し、生徒の心の成長に繋げたいと考えて実施している。

「おんなのこだから」という資料では、男女の違いや平等をテーマとして取り上げている。短く、読みやすいことに加え、生徒が様々な疑問や意見を持つことができる資料は、生徒の心を刺激し、考えるきっかけとなった。

その時々にあったニュースや、話題の人物を紹介できるというのも、「こころ」の利点である。今年度１２月には、アフガニスタンで亡くなった医師の中村 哲さんについての資料を取り上げた。ニュース等で、中村さんが襲撃を受けて亡くなったことは知っている生徒がほとんどだったため、興味深く資料を読んでいた。医師でありながら、命の危険をかえりみず、井戸や用水路を整備した中村さんの功績や行動力、勇気を称え、自分も誰かの役に立つことがしたい、平和のために貢献したいといった感想が多く見られた。



【各学年団の朝道徳フォルダに蓄積された教材データ（一部）】

朝道徳（中村哲氏）での生徒の感想

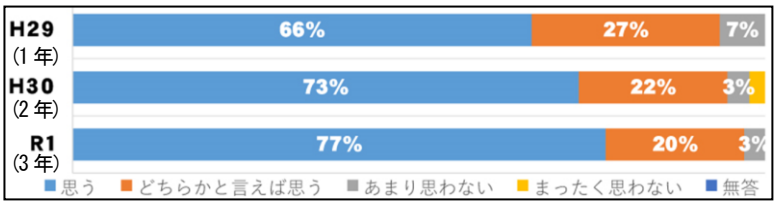
- 今回のニュースを見て中村さんのことを知りました。地下水路をつくったり、何もないところをたくさんの緑でいっぱいにしたり、自分の命よりアフガニスタンの人たちの命を優先していて、すばらしい人だと思いました。私も人の役に立てるような人間になりたいです！

4 研究の成果と課題

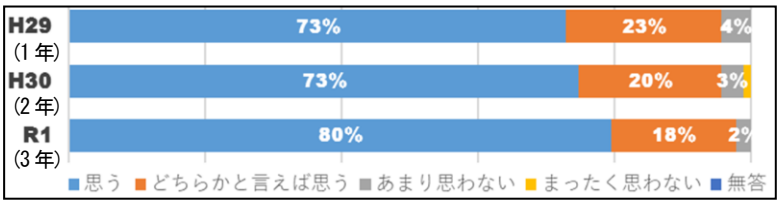
(1) 成果

２年間研究を推進してきたことで、次の３つの成果が得られたと考えている。

１点目は教員の道徳教育に対する意識の高まりである。プロジェクト会や研究大会への参加、研究授業、朝道徳などにより、担任はもちろん、担任以外の教員も、道徳教育に関して様々なアンテナを張り、考え、アイデアを出し合う体制ができてきた。全員で道徳教育を推進するという意識を持つことができたことは、２年間で得られた大きな成果だと感じている。



【人の気持ちが分かる人間になりたいと思いますか 】



【人の役に立つ人間になりたいと思いますか 】

２点目は、生徒の変容である。右のグラフは、現３年生の１年次及び２年次の県学習状況調査、今年度、全国学

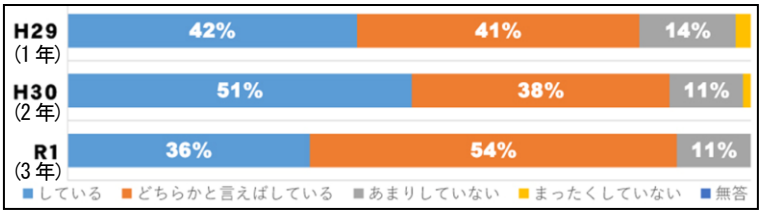
力調査の生徒質問紙の結果からみた経年比較である。

「人の気持ちが分かる人間になりたいと思いますか」、「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」など、道徳的心情に関する複数の項目で、肯定的意見を持つ生徒の割合が増加した。１年生の時より、道徳の時間を通じて、自他の個性を見つめて、よさを認める指導や、いろいろな立場になって、そのとき自分ならどうするべきか、自分に何ができるかについて考えさせる指導を繰り返してきた結果と考える。

３点目は、保護者・地域の方と、道徳教育におけるつながりができたことである。道徳通信や講演会などの取組を通じて、保護者や地域の方と一緒に道徳について考える機会が増えてきた。今後もこの地域連携の取組を続けていくと共に、さらに多くの方の声を聞き、協力を得ながら、学校・保護者・地域が三位一体となって、道徳教育の充実を図っていきたいと考えている。

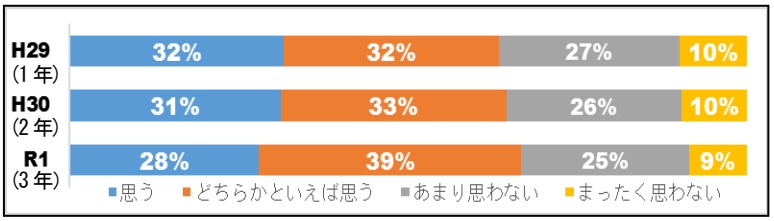
⑵　課題

下の２つのグラフも、上記と同様に現３年生の１年次及び２年次の県学習状況調査、今年度、全国学力調査の生徒質問紙の結果からみた経年比較である。「人が困っているときは進んで助けていますか」など、実践的態度に関する項目については、やや消極的な回答が見られた。授業改善を中心に実践研究を進め、道徳的判断力や心の醸成等、内面形成を図ることにおいては徐々に成果が表れはじめているが、実践的意欲や態度の育成においては不十分であると言わざるを得ない。



【人が困っているときは進んで助けていますか】

その要因として「自尊感情」の低さと相関関係があるのではないかと思われる。右のグラフ「自分にはよいところがあると思いますか」は、同一学年の経年比較データであるが、学年が上がるにつれて、自己有用感や自己肯定感の低下がうかがえる。自分に自信が持てない生徒、そのことが、積極的なコミュニケーション意欲を妨げているのではないかと考える。今年度の課題設定の中で揚げた、自己有用感や自己肯定感の向上という目標達成がいかに難しいかが浮き彫りになった。道徳的実践を通して自信が付き、自分のよさを認められるようになるとの見地から、内面形成のための授業とボランティア等の実践活動の組み合わせが効果的であると考え、地域の方々の力添えを頂きながら、この研究を継続していきたい。



【自分にはよいところがあると思いますか】